

K-148

山形城跡発掘調査報告書

昭和 56 年 3 月

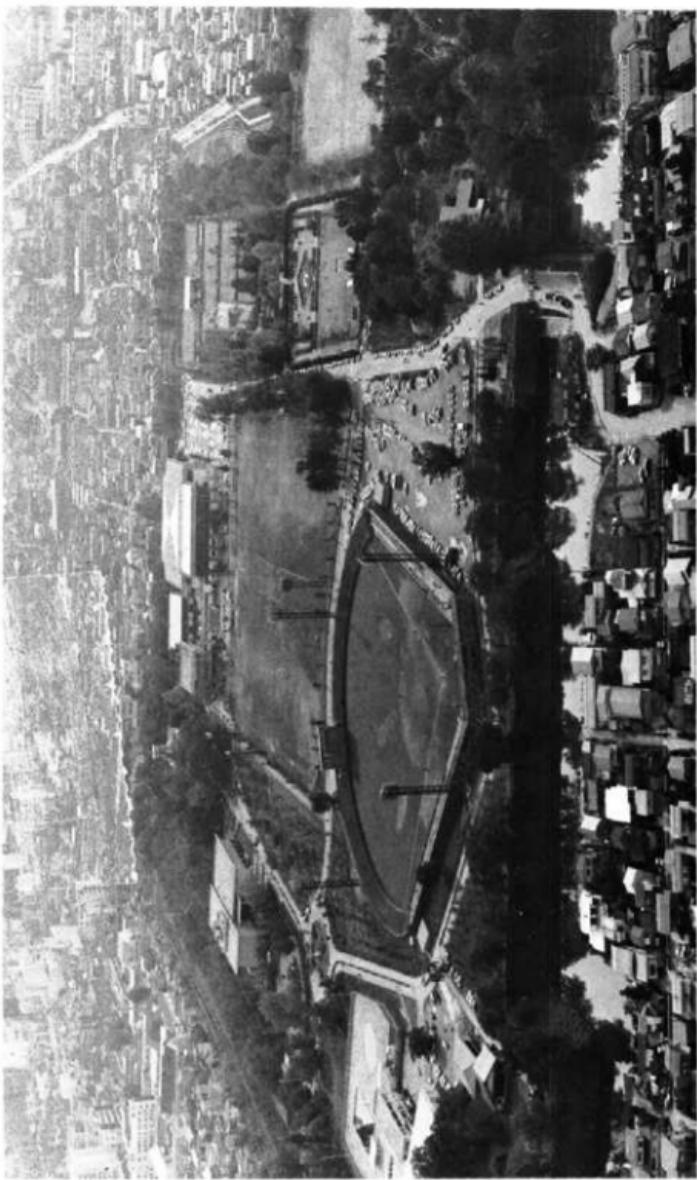
山形市教育委員会

山形城跡発掘調査報告書

昭和 56 年 3 月

山形市教育委員会

山形城二の丸全景（航空写真 昭和54年撮影）



例　　言

1 本書は、山形市教育委員会が昭和54年度に実施した山形城跡緊急発掘調査の報告書である。

2 発掘調査は、昭和54年6月21日から7月10日までの延べ20日にわたって実施された。

3 調査体制および協力者はつぎの通りである。

調査団長 柏倉亮吉（山形県立米沢女子短期大学学長、山形市文化財保護委員）

調査員 赤塚長一郎（山形県教育委員会指導課指導主事、山形市文化財保護委員）、
飯野昭夫（山形県教育センター指導主事）、相田俊雄（山形市立千歳小学校
教諭）、山口和夫（山形市立第四中学校教諭）、尾形ゆり子（山形市立高瀬
小学校教諭）、江川 隆（山形市教育委員会社会教育課）

調査参加者 山形市教育委員会各課職員

調査協力者 山形県教育委員会文化課、山形県立博物館、後藤嘉一（山形市史編さん
委員）

事務局 山形市教育委員会社会教育課

4 本書掲載の写真、図版トレース、編集、ならびに遺物の原図作成は、主として社会教
育課江川隆があたった。

5 本書の執筆は以下のとおりである。

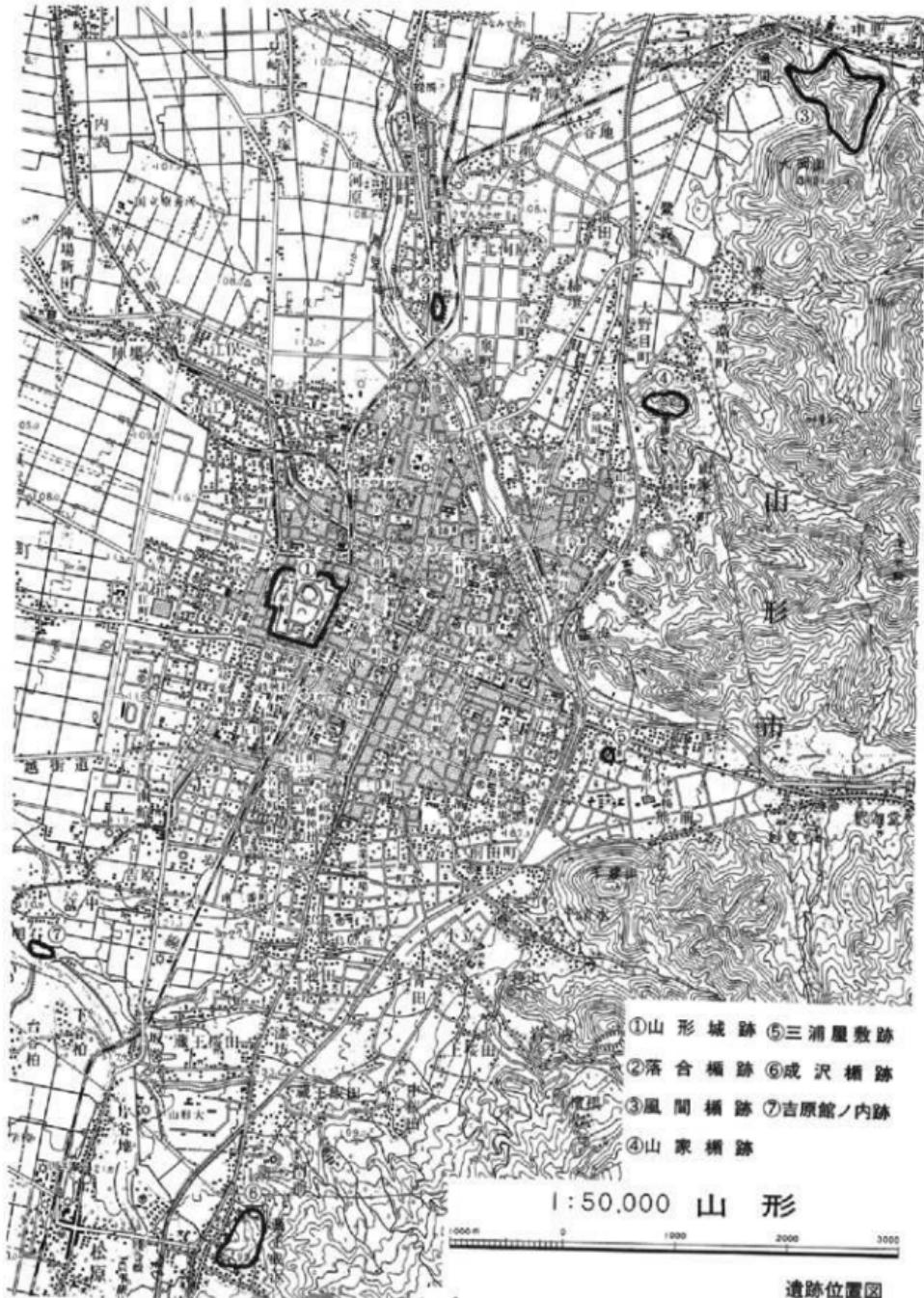
山形城の変遷 後藤 嘉一

はじめに、遺構について、遺物について 江川 隆

まとめ 柏倉 亮吉

目　　次

山形城の変遷	2
はじめに	3
遺構について	4
遺物について	6
まとめ	6
図版	8



1:50,000 山形

遺跡位置図

山形城の変遷

山形市は奥羽山脈藏王山系に源を発する馬見ヶ崎川扇状地に発達した都市で、山形県の首都として行政の中心地であるとともに、内陸経済圏の中核を成す経済都市でもある。

すでに奈良時代より、太平洋方面より内陸に達する基点として発達し、重要な宿駅であった。和銅5年（712）出羽国が建置されたとき、陸奥国より置賜・最上の二郡を割いて出羽国に所属させた。最上郡（もがみぐん）はすなわち現在の村山地方である。間もなく天平年間、鎮守府将軍大野東人が、内陸原住民を統治するため、山形の地に城砦を設けたとの伝説あるが確証は無い。

時代は降って南北朝時代、正平11年（北朝年号延文元年・1358）、北朝足利氏の一族、斯波兼頼（しばかねより）が出羽国按察使として山形に入り、築城したのが山形城の創始であり、位置は現在の山形城址附近と伝えられている。斯波氏はこの地に土着し、地名をとって最上氏と称した。それより約200年を経て、戦国争乱の時代となり、最上氏11代といわれる義光（よしあき）が出て、近隣諸族を平定し、山形を首都として壮大な城下都市建設をすると共に、大規模の築城をした。本丸・二の丸・三の丸と濠堀をめぐらした典型的な輪郭式平城で、三の丸は東西14町50間（約1617m）、南北14町15間（約1553m）で、現在山形駅をふくむ旧香澄町一帯の市街地がその郭内であった。二の丸は東西4町3間（約443m）、南北4町21間（約474m）、その面積5万1,800余坪（約16万1000m²）に達し、現在「霞城公園」となっている。その中に本丸があったが今はその遺構も無い。

慶長5年（1600）、関ヶ原合戦を前に、最上義光は東軍徳川氏に属し、西軍豊臣氏に属する会津上杉氏の部将米沢城主直江山城守兼続の攻撃をうけ、よく防戦して会津軍の中央進撃を阻止した功により、庄内3郡および秋田由利郡を与えられ、表高57万石、実力100万石を超える奥羽第一の大名となった。この戦いで山形城は霞に包まれ、敵の攻撃を免れたというので「霞ヶ城」の愛称で呼ばれるようになった。

慶長十九年（1614）義光死去と共に、部将間の内訌により、徳川幕府の忌諱に触れて、元和8年（1622）城地を没収されて廃絶し、その跡地は徳川譜代大名に分与された。山形は鳥居忠政が24万石で封じられ、その後、保科松平氏20万石、結城松平氏15万石、奥平氏9万石、堀田氏10万石、秋元氏6万石など、領主の更迭が頻繁に行なわれ、これに伴ない領地も削減されて、幕末には僅か5万石の水野氏となった。その間、城下商人は特産の紅花・苧麻を最上川舟運を利用して京阪地方に移出し、暖国産の綿・砂糖・塩・工芸品等を移入して、商業都市として発達した。

明治維新によって山形城は新政府に没収され、山形県庁の所管となり、明治9年(1876)統一山形県成立とともに、初代県令三島通庸は旧城二の丸内に県営種畜場を設けたが、23年(1890)旧藩主水野氏に払い下げられ、次いで水野氏より旧藩士族らに分譲されたが、やがて市内有力商人等に転売されて、城内は農耕地・薪伐地として荒廃した。

明治29年(1896)、日清戦役後の軍備拡張で、山形に一個連隊設置されることになり、山形市は旧城二の丸内を約3万円で買い受けこれを陸軍省に寄附し、歩兵第32連隊が設置された。明治38年(1905)、日露戦争に出征し、満州奉天郊外黒溝台の激戦で約半数が戦死傷する犠牲を出し、生き残って凱旋した将兵が賄金して染井吉野桜の苗1000本を購入し、當壘・當庭に植えたのが、今もなお爛漫と花を咲かせている。次いで昭和6年満州事変に出征、昭和12年、支那事変が起ると山形32連隊は全隊北満国境警備に配置されて移駐し、その跡には戦時編成の部隊が次々と入営しては戦線に動員され、太平洋戦争末期には32連隊も沖縄に移って玉砕し終戦を迎えた。

戦後、軍の解体とともに部隊跡は進駐軍に接収されたが、間もなく日本政府に返還され、旧兵舎は海外引揚者収容に使用されたが、やがて山形市は昭和23年に約2,000万円で払い下げをうけ「靈城公園」として市民に開放することになり、旧兵舎は一時、新制中学校や電信電話局に使用されたことあったが、順次他に移転し、野球場・テニスコート・バレー・コート等を設置してスポーツ公園とし、また県立体育館・県立博物館を建て、また明治初年建築物として市街地中央部に遺存していた市立病院済生館本館の三層棟が国指定の重要文化財となり、これを公園東南部に移築復原して「山形市郷土館」とし、さらに市児童会館・市民プール・弓道場等の文化施設が整備され、市民憩いの場となっている。

(後藤嘉一)

はじめに

この調査は、山形県遺跡地図記載の遺跡番号1の山形城跡について、靈城公園内夜間照明施設建設工事に伴う緊急発掘調査として、昭和54年6月21日から7月10日にかけて行ったものである。

調査区域は約161,000m²の広さをもつ二の丸内のうち、運動広場および野球場に付設する夜間照明鉄塔建設箇所ならびにそれらの鉄塔をつなぐケーブル線埋設部分であった。調査は鉄塔建設箇所においては既に、4~5m四方・深さ2~4mの規模で機械力により土が掘り下げられ、更に底面には鉄骨が組まれコンクリートが流されているという状態から開始され、グリットやトレチを計画的に設定し平面的に掘り下げていったものではない。

また、工事と並行して調査を進めなければならないということで、新たな調査区域の設定・拡張は行わず、したがって掘り下げられた部分の壁面（縦の面）の調査に限定されることとなった。

このような状況をふまえ、次のことに調査の視点を置いた。

- ①土層は乱れずに堆積しているか、また遺物包含の有無
- ②礎石および土壘等の遺構の有無
- ③遺物と遺構との関係

また、全体の進め方として、平面的調査は不可能であると判断し、壁面を精査して四面のセクション図を作製するという方法をとった。

遺構について

山形城二の丸内は、明治29年（1896）の歩兵第32連隊の設置以降数回にわたって建物がたて替えられ、現代においてはガス管や水道管・ケーブル線等が埋設され、攪乱を受けている部分が非常に多い。また、二の丸内という広大な面積に対して点というような調査範囲で、しかも縦の面（壁面）だけの調査では、遺構の確認はできないのではなかろうかと心配されたのであるが、断面ながらも遺構としての存在を確認できた地点がある。

これらの地点について概観する。

○野球場D地点

東と西の壁面から確認できるものである。

扇状地端に堆積したと考えられる砂礫層を南側から北側に傾斜しながら掘り込んでおり、南側の掘込まれていない砂礫層上には少なくとも四層にわたって版築が行われていることが確認された。

砂礫層の掘り込まれた底面から版築と確認できる上面までの高さは約2m余である。

本遺構は本丸堀跡の内側の土壘と推定されるが、版築が何層にわたって行われているのかや、北方が調査できないため堀幅といったものはわからない。なお、東と西面の砂礫層の落ち込みの上端を結ぶ線は、N-43°-Wを測る。

○野球場E地点

北の壁面から確認できるものである。約1mの表土層下に、東側から西側にかけてはつ

きりとした落ち込みを示している。

その幅は、西側が調査できず不明であるが深さは約1m40cmを測る。

覆土は十層であるが、特に底面から約40cm内には水分を多量に含んだ腐蝕土が七層にわたってレンズ状に堆積している。

これらの状況から、この遺構には水がたたえられていた可能性が極めて強い。

また、覆土である腐蝕土からは、完形、破片を含め六個体分の土師系土器が出土している。

○運動広場A地点

北を除いた東・西・南の壁面から確認できるものである。

地表下約60cmにある厚さ40~60cmの第III層中に径約50cmの河原石が平らな部分を上面にしてほぼ水平に並べられており、この石を含む第III層並びにそれに続く下層は固くしまっている。

平面的広がりをもっていたと考えられるが、その規模や性格ならびに時期はわからない。

○運動広場G地点

南壁面の地表より約1.8mの第V層下に確認できるもので、径30~40cmの河原石が人為的に積まれた状態で存在している。東・西・北の壁面は比較的に安定した土層堆積を示し、このような石積はみられない。

この石積が南方向に平面的に広がりをもつのか、または上層部分から下層方向に続くのかは不明で、その規模や性格・時期といったものはわからない。

○運動広場H地点

南と北の壁面に確認できるもので、約60cmの表土層の下に東側から西側にかけての落ち込みとして現われている。

東側の落ち込みを形造っている層は五層まで確認でき、非常に固くひきしまった層をしている。また、落ち込んでいる層は一層としてとらえることのできる径10~20cmの河原石を主体とするもので、西側では掘り下げられた部分の底面まで続いている。

西側がどのような状態で続くのか、落ち込みが遺構であるか、河原石の層そのものが遺構であるのかはわからず、その規模や性格、時期は不明である。

なお、ケーブル線埋設の際、この河原石を主体とする層がF地点方向（北方向）へ続くことが確認された。

遺物について

○瓦

今回出土した遺物は、そのほとんどが瓦片であり、これらの瓦はすべて調査以前に機械力により掘り上げられたものである。したがって、どの層からどのような状態で出土しているかは不明であり、層位的に時代判定をくだすことができない。

時期的に大別すると近世以前の瓦と現代瓦に分けられる。

近世以前の瓦には黒色を呈するものと赤褐色を呈するものの二種類があり、本瓦葺用のものである。この近世以前の瓦には、有紋の軒丸瓦・軒平瓦が数点あるが、その他多くのほとんどは丸瓦及び平瓦であり、大きさ形にも違いが認められる。この違いが時期的なものなのか、建物等の相違によるものなのかは不明である。

○土器

土器には、野球場E地点より出土した土師系土器がある。

ロクロ使用の左回転の糸切痕を有し、胎土及び焼成ともに良好である。

室町から近世頃の祭祀用のものと推定される。

まとめ

改めていうまでもなく、霞城公園は、最上氏以来、山形城々主の居城たる旧山形城の二の丸の郭内にある。明治29年、歩兵第32連隊を設けるに当たり、本丸を画する土壘・周濠は平夷されて広場となつたと伝えられるが、二の丸の土壘・深濠は、ほぼ原形を保ちながら今日に至っている。大正8年、史蹟名勝天然紀念物保存法の施行に伴い、県はこれに基づいて調査機関を設けたが、該会の調査の結果、本城跡は史蹟として県指定を受けた。大正14年刊行の山形県史蹟名勝天然紀念物調査報告第一輯は、史蹟の筆頭に山形城址をあげ、詳述している。その範囲は「東西220間、南北235間余、面積58,000余坪」と記しているが、これが指定面積なのか否かは明らかでない。続いて昭和2年3月、県は渡辺弥太郎氏の後援を受けて史蹟としての標識を東門跡に建立した。

昭和25年5月、文化財保護法の公布とともに、この史蹟名勝天然紀念物保存法による史

跡指定は再指定せらるべきであるが、その処置はまだ完了していない。

第二次大戦後の昭和24年、郭内の中心部に野球場また運動広場も設けられたが、周辺部の土壘・濠濠は変化を受けなかった。このような経緯を経て昭和53年3月刊行の山形県遺跡地図には、山形城二の丸の周濠・土壘の部分を画して城跡と登録している。

調査団による調査は、6月21日から始められた。しかし調査にはかなり厳しい制約があった。その1は、運動広場・野球場をめぐって照明灯を建設すべき10余箇所の予定地以外に、調査用のトレッセを特に掘る余裕がなかったことである。その2は、市民の運動で夜間の照明の最も要望される夏期に照明灯の建設を終了しなければならなかつたことである。従つて調査は、照明灯の建設工事と提携して行われなければならなかつた。

照明灯の建設は、野球場をめぐって5基、運動広場をめぐって8基、合せて13箇所である。13箇所の分布は、郭内の中心部に南北330m、東西150mの橢円形を描く線上の13の点に過ぎない。その1つの点の大きさは約4m平方の方形の穴である。この方形内の平面の一部分と四壁面に現われた地層状態とそこからの出土品によって旧形を推定しなければならなかつた。

これら掘穴の分布地点は、山形城の古図類から推察すると、旧本丸の周辺部に当るらしい。しかし、明治中頃における高低地均し作業による錯乱、更に運動場整形作業による変貌等によって、遺構等を把握することは想う程に容易ではなかつた。

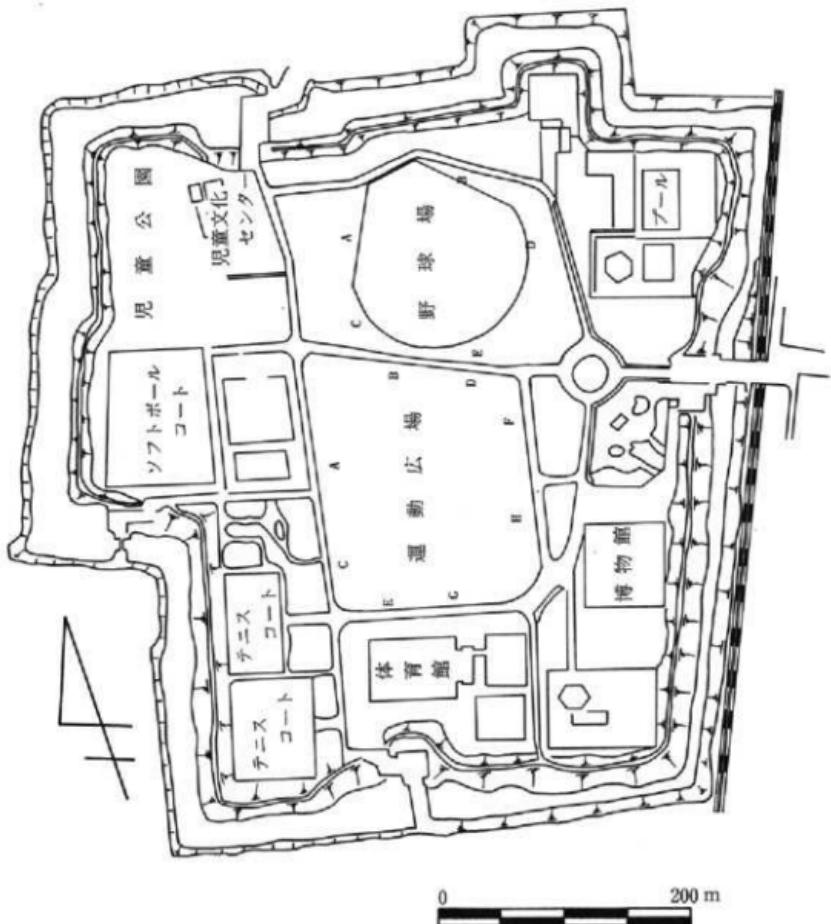
このような中で、時期や規模・平面形態等は不明ながらも、何らかの遺構であろうと考えられる地点を数箇所確認できたことは大きな成果であった。その中でも特筆すべきはやはり、野球場D地点において確認された、旧土壘と外周する濠の状態なるかを想わせる遺構である。馬見ヶ崎川の扇状地に堆積した砂礫層を掘り込んで、その上に版築が行われているこの遺構は、幅や高さといった規模が充分に把握できなかつたものの、野球場建設作業中、軟質地盤に苦しんだという外野席付近と相接するところからみると、本丸周濠の跡と推察することも十分可能性あるものと思われ、更に今後、山形城の調査研究を推めていく際の大きな指標となるものであった。

また、今回出土した瓦は、山形市郷土館に収蔵されている山形城に係る瓦と言われているもの、更には昭和14年に二の丸西南角の堀中から発掘され現在山形市立第一小学校に所蔵されている瓦と合わせて、山形城本丸跡等の建築遺構を研究する上で貴重な資料となるものである。

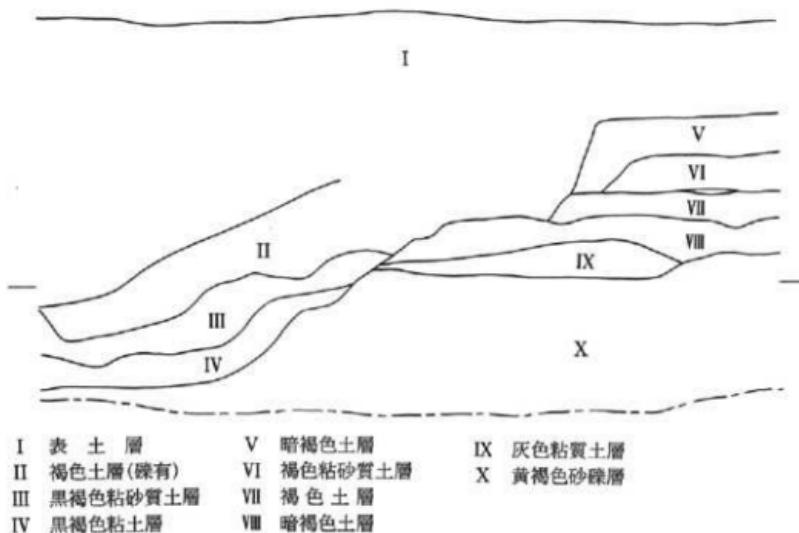
総じて言えば、今回の調査は照明灯建設に伴なう緊急調査であり、山形城本丸の規模・建築遺構、それらの年代的変遷等の基本的な問題に迫るに足る余裕がなかつた。本報告の所論も隔靴搔痒の憾みがなしとしない。この点は他日の機会を待ちたいと思う。

(柏倉亮吉)

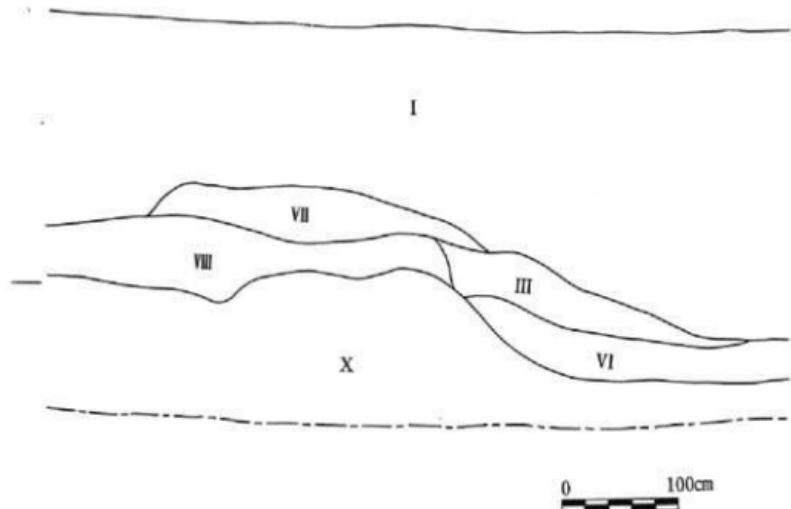
図 版



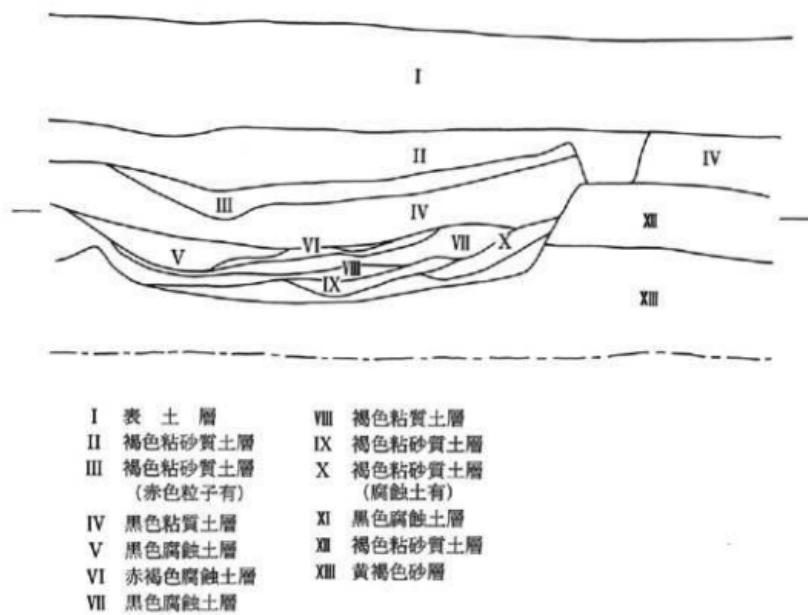
第1図 遺跡全体図



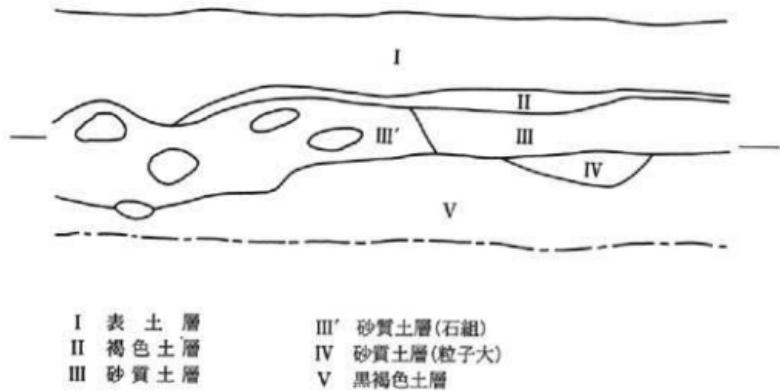
第2図 野球場D地点(東面)



第3図 野球場D地点(西面)

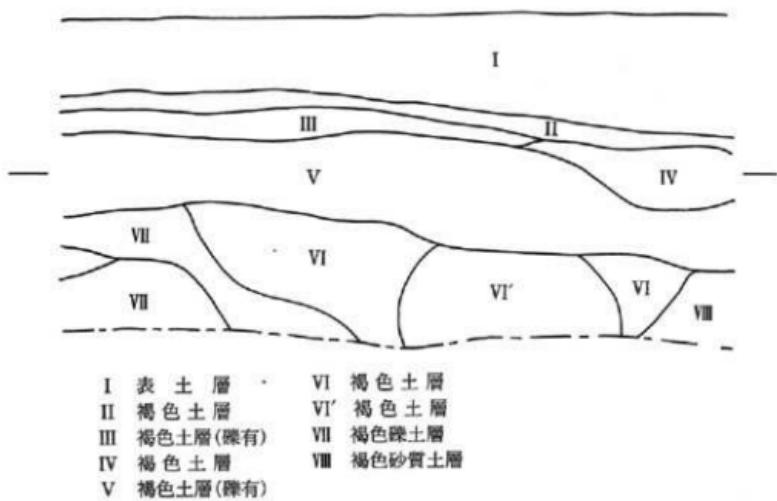


第4図 野球場E地点(北面)

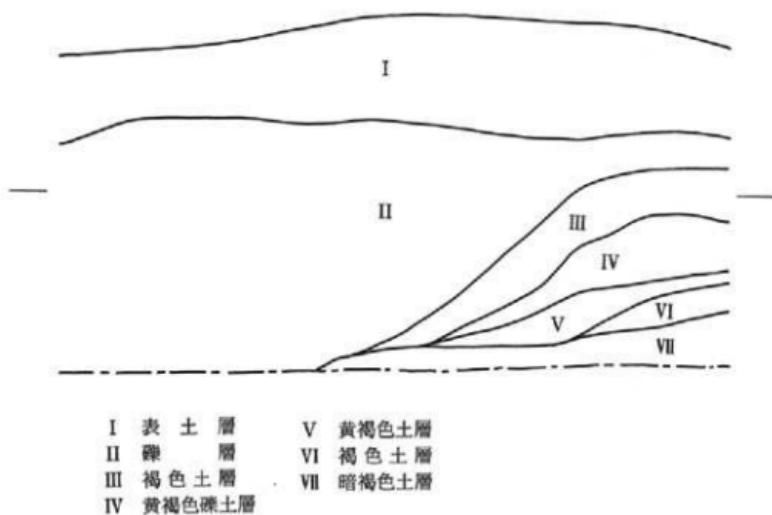


0 100cm

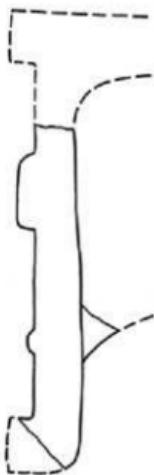
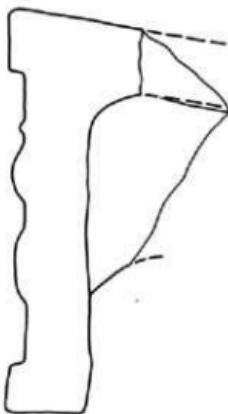
第5図 運動広場A地点(西面)



第6図 運動広場G地点(南面)

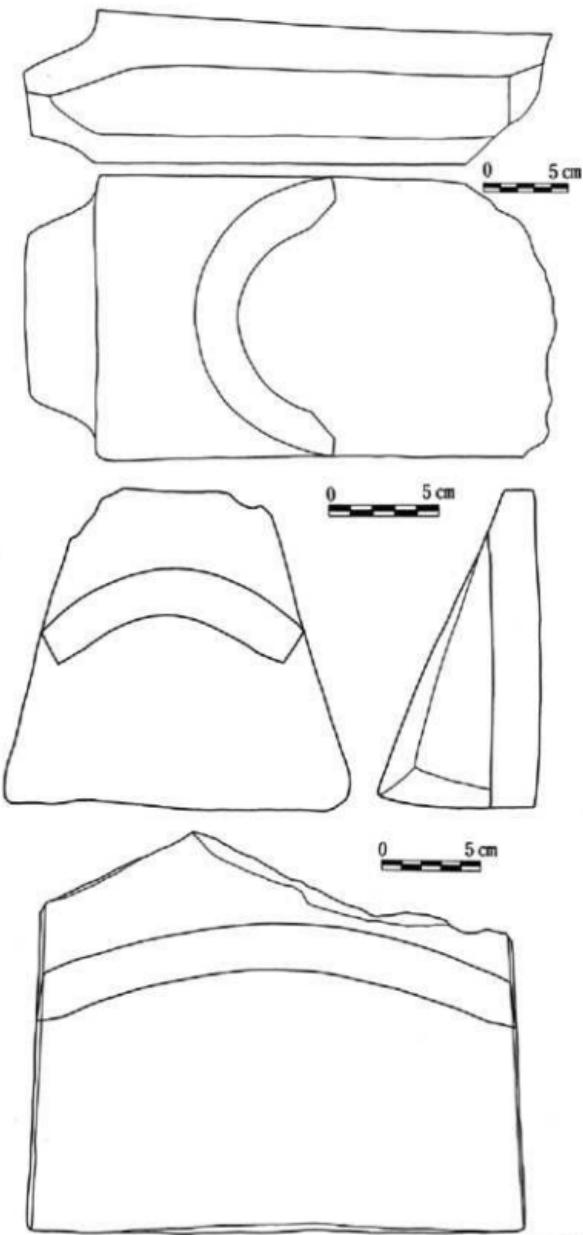


第7図 運動広場H地点(北面)

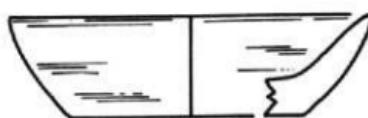
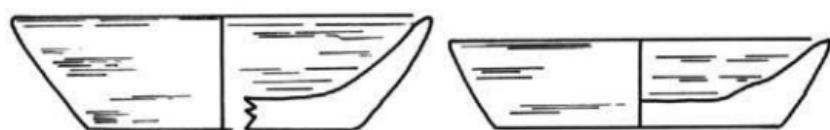
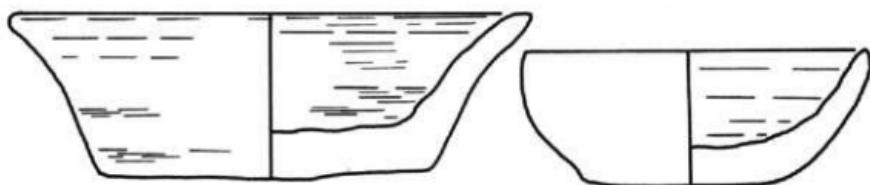


0 5 cm

第8図 出土遺物(瓦)実測図



第9図 出土遺物(瓦)実測図

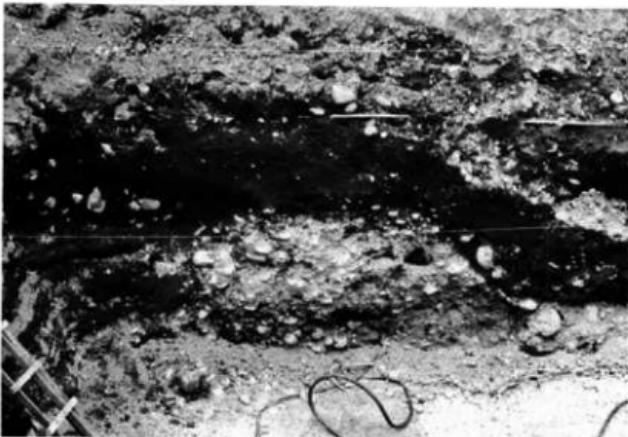


第10図 野球場 E 地点出土遺物(土器)実測図

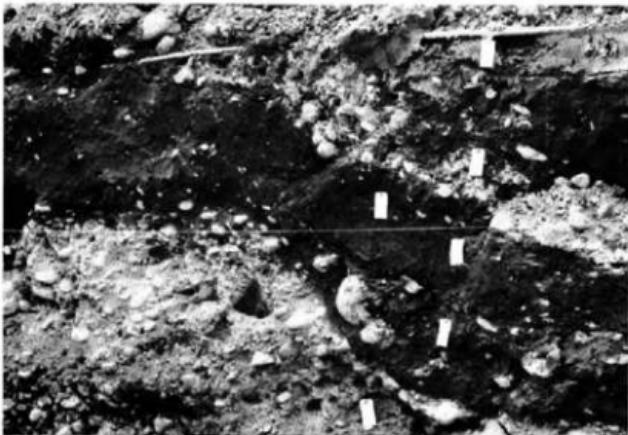
写 真 図 版

図版 1

野球場 D 地点(西面)



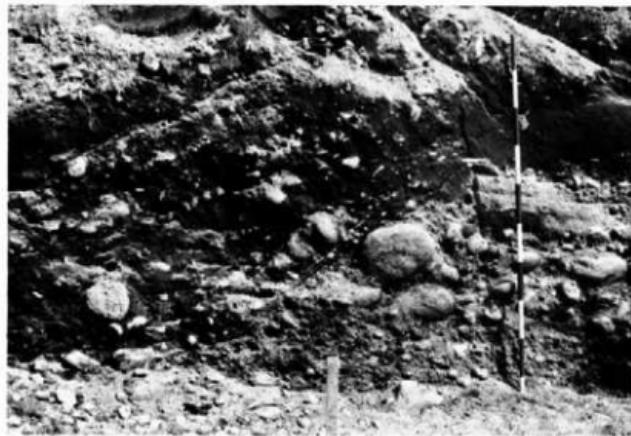
野球場 D 地点(西面)



野球場 D 地点(東面)

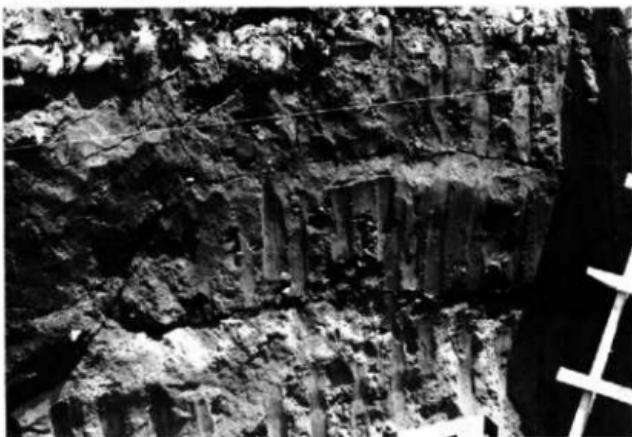


野球場 D 地点(東面)

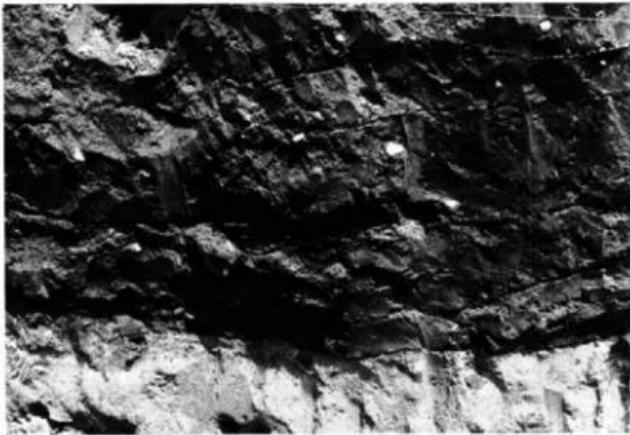


図版 3

野球場 E 地点(北面)



野球場 E 地点(北面)



図版 4

運動広場 A 地点(西面)



運動広場 G 地点(南面)



運動広場 H 地点(北面)

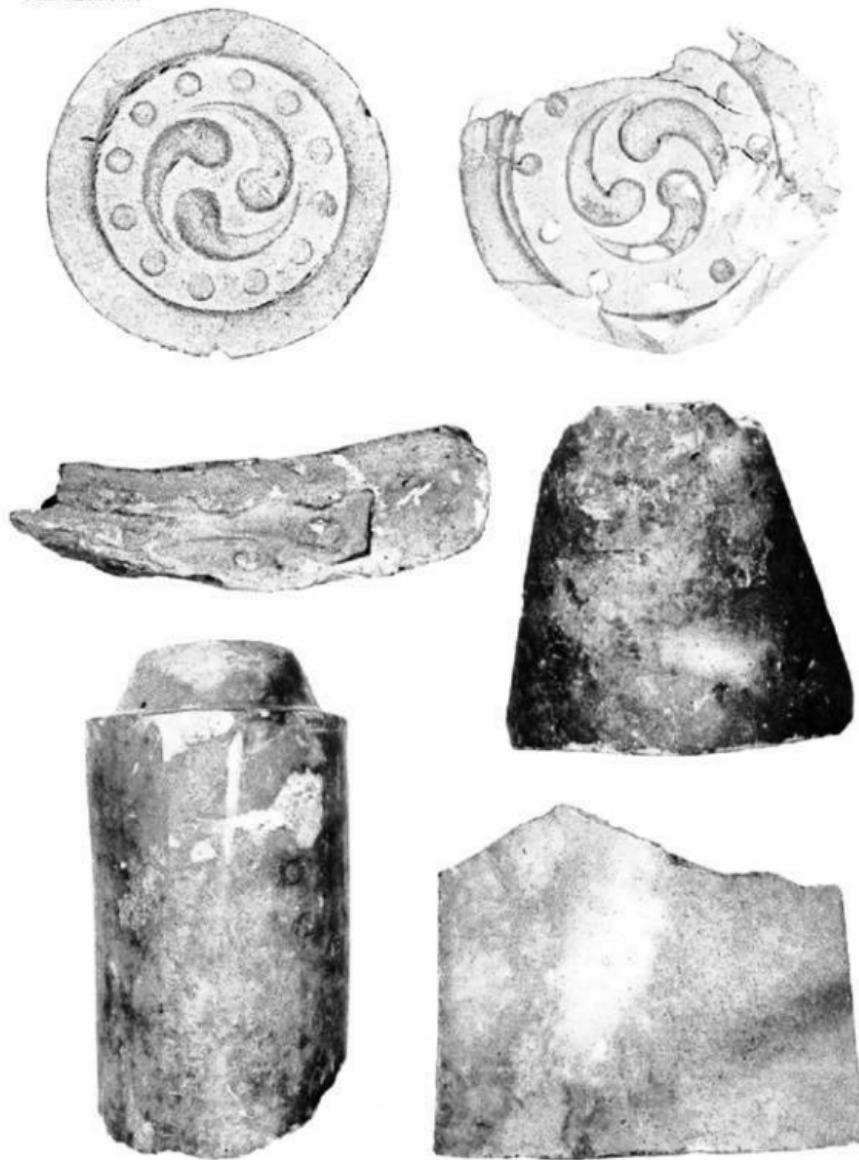


運動広場 H 地点(南面)



出土遺物(瓦)

図版 6

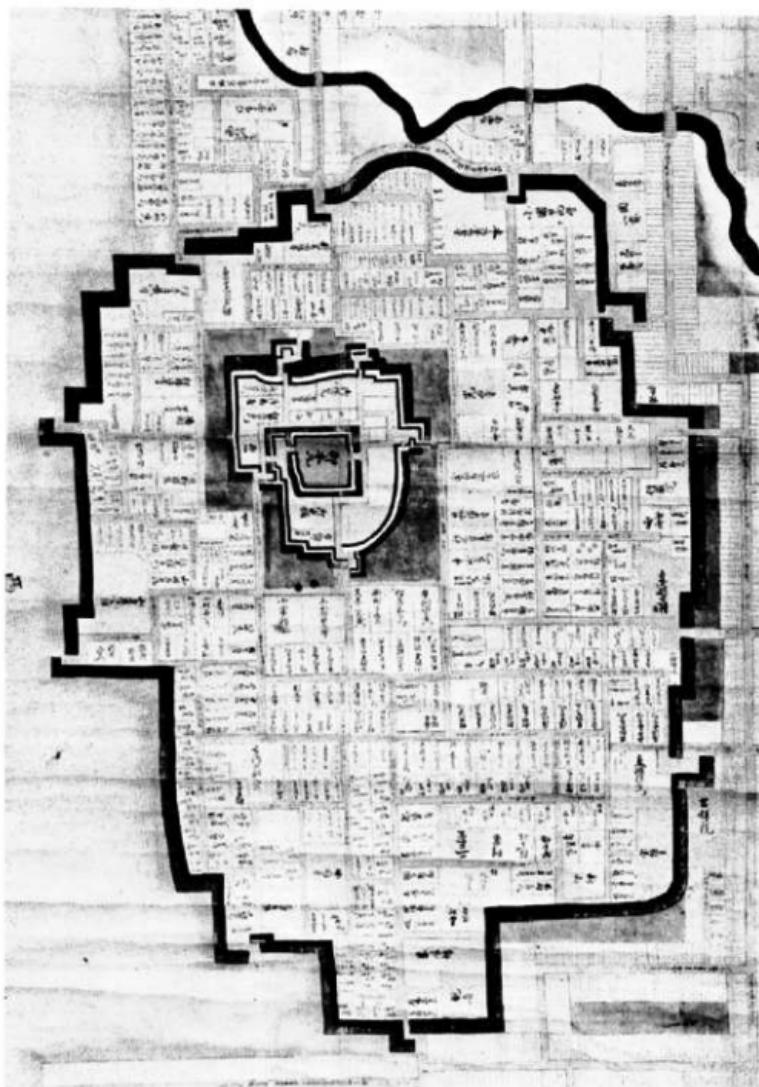




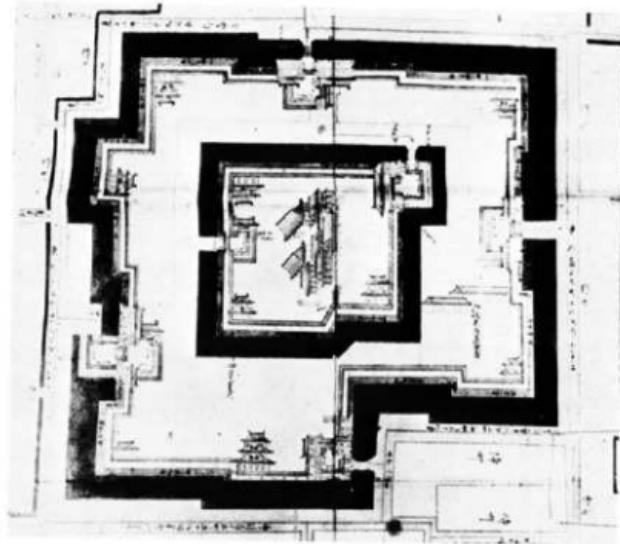
資 料

山形城の絵図・その他

最上氏時代の山形城絵図
山形県立図書館所蔵



正保時代の山形城絵図
国立公文書館(内閣文庫)所蔵

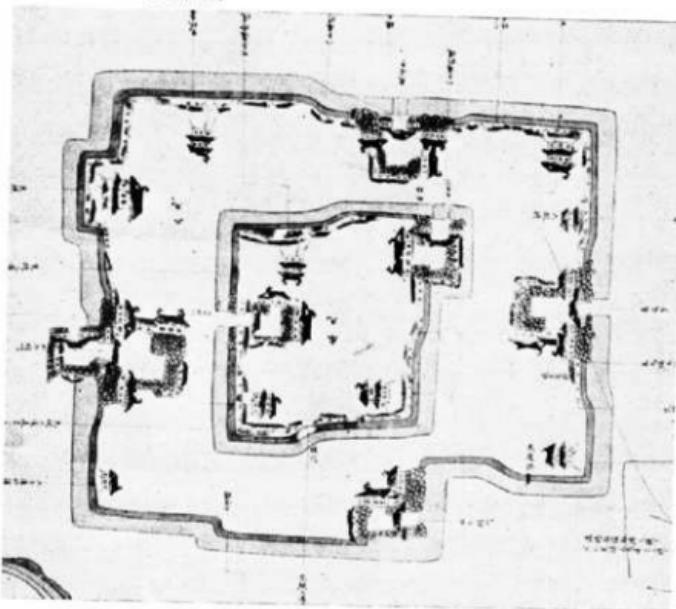


堀田氏時代の山形城絵図（享保 4 年）
佐倉市厚生園所蔵



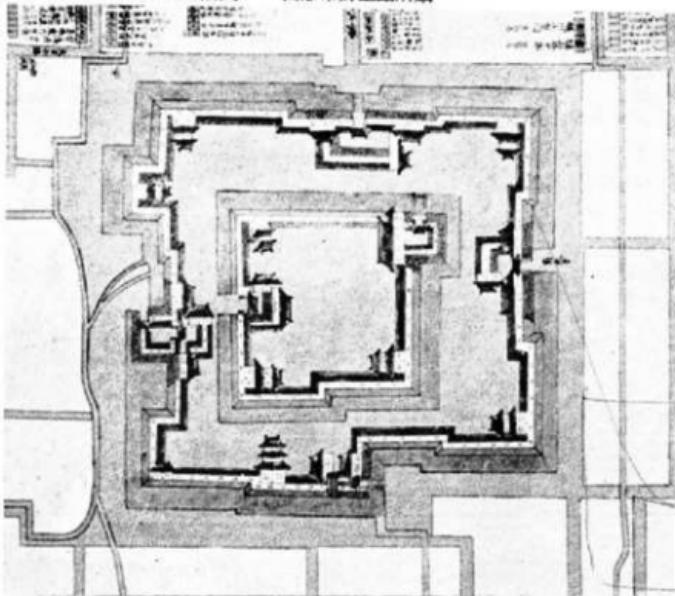
山形城修復絵図(明治 6 年)

山形市立第 1 小学校所蔵



秋元氏時代の山形城絵図

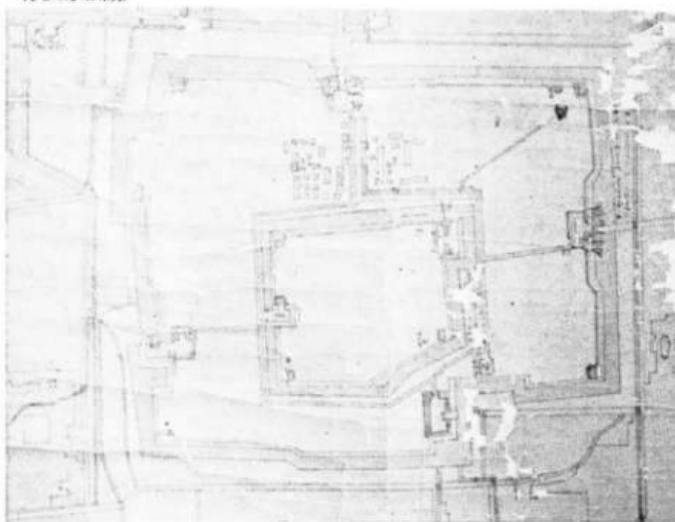
山形市郷土館所蔵



秋元氏時代の山形城絵図

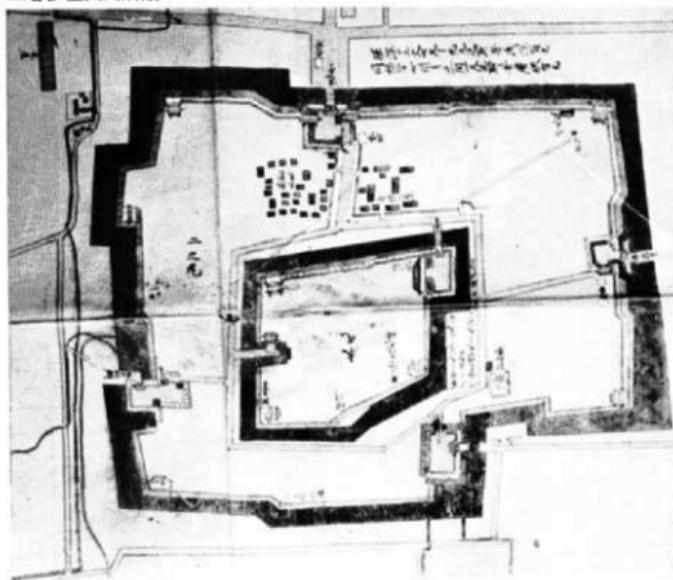
山形市立第1小学校所蔵

(秋元家旧蔵)



水野氏時代の山形城絵図

三春伊佐夫氏所蔵



東大手門の写真(明治初年)

菊地新学撮影



山形城の鰐瓦

山形市立第1

小学校所蔵



山形城跡発掘調査報告書

昭和 55 年 3 月

発行 山形市教育委員会
山形市緑町 1 丁目 1 番 21 号

印刷 株式会社 大風印刷
